

天塩川流域のオジロワシとの共生について —基礎調査データの検証と保全対策—

旭川開発建設部 名寄河川事務所

○大塚 康平
亀井 尚
大串 正紀

「北海道遺産」天塩川は、幹線流路延長256kmを誇る北海道第2の大河である。その流域は豊かな自然が色濃く残り、オジロワシの内陸部有数の営巣地として知られている。

名寄河川事務所では、専門家の助言のもと、オジロワシの繁殖に最大限の配慮をしながら工事を実施している。本報では、これまでの基礎調査から得られた天塩川中・上流部のオジロワシの生態に関する知見と名寄河川事務所の保全対策について報告する。

キーワード：自然環境、保全・共生

1. まえがき

天塩川は、その源を北見山地の天塩岳に発し、士別市で剣淵川、名寄市で名寄川等の支川を合流し、山間の平地と狭窄部を蛇行しながら流下して中川町に至り、さらに天塩平野に入って間寒別川等の支川を合わせて天塩町において日本海に注ぐ、幹線流路延長256km、流域面積5,590km²の一級河川である。

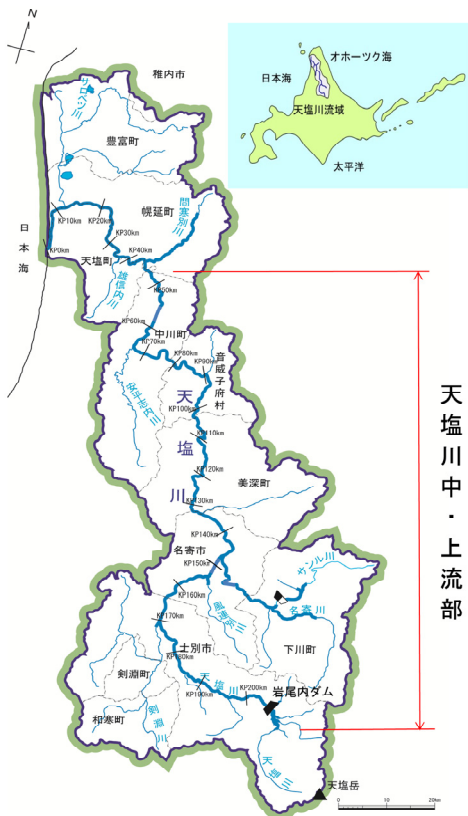


図-1 天塩川水系図

平成19年10月に天塩川水系河川整備計画を策定し、段階的に整備を進めているが、天塩川及びその支川は未だ整備途上であり、現在、名寄川合流点から下流の区間で戦後最大規模の洪水を安全に流下させるために堤防の整備および河道の掘削を実施している。

天塩川流域ではオジロワシの繁殖が毎年のように確認されていることから、名寄河川事務所では、「オジロワシと河川整備の共生」を目標に掲げ、専門家の助言を得て各種調査および保全措置のもとで工事を実施している。

本報では、これまでの猛禽類調査で得られた天塩川中・上流部のオジロワシの生態に関する知見と名寄河川事務所が実施した保全対策について報告する。

2. オジロワシ基礎調査データの検証

(1) オジロワシについて

オジロワシは、冬季に我が国へ飛来、越冬する大型の猛禽類で体長約76～98cm、翼開長約199～228cmであり、多くの個体は春季にロシアに渡り繁殖するが、一部は我が国に留まり、北海道の海岸、湖沼周辺等で繁殖する。主に魚類を食べるほか、水辺の鳥等も捕食する。主たる越冬地は北海道及び本州北部であるが、全国的に生息が確認される。



写真-1 オジロワシ

オジロワシは、天然記念物、特殊鳥類、国内希少野生動物種（絶滅のおそれのある野生動物の種の保存に関する法律）に指定されているほか、環境省第4次レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類（VU）、北海道レッドリストでは絶滅危惧種（En）に指定されている。また、平成17年12月1日には、文部科学省、農林水産省、国土交通省、環境省により、「オジロワシ保護増殖事業計画」が策定されている。

(2)調査内容

名寄河川事務所による天塩川中・上流部の希少猛禽類調査は、平成19年に天塩川水系河川整備計画に基づく河道掘削等による影響を把握することを目的に美深町の河川延長約27kmの範囲で定点観察調査を行ったのが始まりである。その後、平成21年には下川町、平成25年には中川町、名寄市で定点観察調査を実施した。また、平成25年には名寄河川事務所管内の天塩川および名寄川沿川の営巣地の確認を目的とした「生息分布調査」を開始した。定点観察調査及び生息分布調査は、工事予定地周辺の希少猛禽類保全対策検討を目的とした基礎調査であり、調査箇所や期間等多少の変更はあるが、現在も継続している。

(3) 分布

名寄河川事務所の調査では、平成20年以降、天塩川中・上流部でオジロワシの営巣地を19箇所確認している。これまでに確認した営巣地の分布を図-2に示す。

a) 天塩川の営巣範囲

オジロワシ営巣範囲は、中川町から名寄市にかけて分布しており、名寄市より上流は岩尾内ダム湖周辺で繁殖

している可能性があるが、営巣木は確認していない。

天塩川のオジロワシ営巣範囲は、河床勾配が1/1,000より緩やかな区間とほぼ重なっている。これは、魚食性が強いオジロワシが営巣に際し、河川の緩流部を餌場として利用していることを示唆している。

一方、名寄地区では、河床勾配1/700程度の急流部でオジロワシつがいの存在が確認された。確認地点近傍の天塩川には堰が設置されており、このため堰上流の一部に流れの緩やかな区間があるほか、稜線を越えた背後に朱鞠内湖が存在していることから、オジロワシがこれらを餌場として利用している可能性がある。

b) 名寄川の営巣範囲

天塩川支川の名寄川は、豊かな森林に恵まれた流路延長約53km、河床勾配のほとんどが1/500以上の急流河川である。名寄川流域は、一見するとオジロワシの繁殖に適した環境を有しているように見えるが、オジロワシの営巣は年間1箇所しか確認されていない。既往調査で確認した営巣地は堰近傍に位置しており、周辺に旧川等もないことから、名寄川では堰によって生じた緩流部を餌場として利用している可能性がある。

c) オジロワシの営巣と河床勾配

天塩川中・上流部のオジロワシの営巣地は、以下の条件のもとで分布していると考えられる。

- ①河床勾配1/1,000以下の緩流区間
- ②ダム湖等の湛水池周辺
- ③河床勾配1/1,000以上の急流区間の堰周辺

このように、天塩川中・上流部のオジロワシの営巣範囲と河床勾配の関係が示唆されたが、これについては今後の調査でさらに検証を深めていきたい。

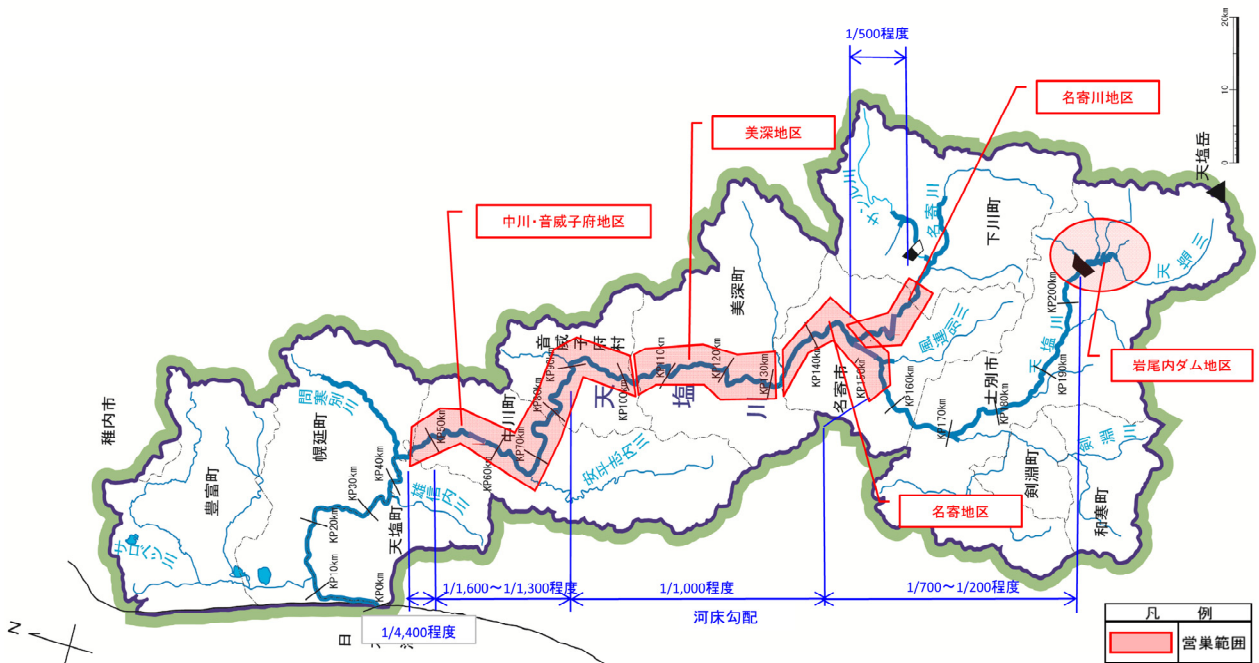


図-2 天塩川中・上流部のオジロワシ営巣地の分布と河床勾配

(4)繁殖状況

表-1に天塩川中・上流部のオジロワシの繁殖履歴を整理したが、表中の繁殖結果については、以下のように定義した。「繁殖成功」は、産卵し幼鳥の巣立を確認したものとした。「繁殖失敗」は、産卵したが幼鳥の巣立に至らなかったもの、もしくは、幼鳥の巣立が未確認のものとした。「産卵なし」は、巣材搬入や巣繕いの有無に関わらず、産卵しなかったものとした。

a) 産卵数

直接巣内を観察することができないため、確認した雛の数を産卵数と仮定すると、産卵数は1~2個で国内外の事例と同様の結果であり、地域性は認められない。

b) 繁殖成功率

天塩川中・上流部の地形や環境を考慮し、繁殖地を以下のように区分した。中川・音威子府地区は、大部分が北見山地と天塩山地の間を天塩川が縫うように流れる山間地形である。名寄地区は、広大な名寄盆地の中央に位置し、名寄市街を抱える平地が多い地形である。美深地区は、名寄盆地の北部に位置し、中川・音威子府地区と名寄地区の中間の様相を呈した地形である。そして、名寄川地区は、豊かな森林と急流河川の山間地である。

オジロワシの繁殖成功率は、全調査期間（9年間）通算で48.9%である。繁殖成功率は、平成20年から25年にかけて平均72%を記録しているが、平成26年以降は平均23%であり、近年繁殖成功率が低下している。

次に、地区別の繁殖成功率をみると、地区ごとの傾向

が顕著に表れた。中川・音威子府地区は、平成20年から25年にかけて繁殖成功事例が多く、天塩川中・上流部の主要なオジロワシ繁殖地だったが、平成26年以降は、繁殖成功事例が1例のみである。それに対し、美深地区と名寄川地区は平成25年以降、繁殖成功事例が継続しており、現在の天塩川中・上流部における主要な繁殖地になっている可能性がある。一方、名寄地区はこれまで一度も繁殖成功事例がない。これは、他の地区と比べて営巣地が市街地や耕作地に近く、雪解けとともに人間活動が活発になることが原因の可能性もある。

c) 産卵箇所数

オジロワシの産卵箇所数は、平成25年以降、それまでの定点観察調査に加えて、天塩川中・上流部全域を踏査する「繁殖確認調査」を実施したため、以前の記録と単純に比較することができない。全域踏査を実施した平成25年以降の産卵箇所数は年間7~8箇所を推移しており、平成28年は過去最高の8箇所を記録した。近年、道内のオジロワシの産卵箇所数は増加しているが、繁殖成功率が低下していることが指摘されており、天塩川中・上流部についても同様の傾向を示している可能性がある。

d) 巣立数

天塩川中・上流部のオジロワシ幼鳥の巣立数は、年間最大7羽、最小1羽、平均3.9羽（9年間）である。巣立った幼鳥全てが無事、成鳥になるとは限らないが、天塩川中・上流部では年間4羽程度のオジロワシ生産能力を有しているようである。

表-1 繁殖履歴

	中川・音威子府地区							美深地区					名寄地区					名寄川地区	合計(各年)					
	中音1	中音2	中音3	中音4	中音5	中音6	中音7	美深1	美深2	美深3	美深4	美深5	名寄1	名寄2	名寄3	名寄4	名寄5		名川1	繁殖成功 ○	繁殖失敗 ×	繁殖回数 (○+×)	繁殖成功率 (%)	巣立数 (羽)
H20	-	-	○ 2羽	-	○ 2羽	-	○ 1羽	△	/	?	△	○ 2羽	-	-	-	-	-	-	4	0	4	100.0%	7	
H21	-	-	△	-	○ 2羽	-	○ 2羽	△	/	?	×	○ 1羽	-	-	△	×	-	△	3	2	5	60.0%	5	
H22	-	-	△	-	△	×	○ 2羽	△	/	×	△	△	-	-	△	△	-	△	1	2	3	33.3%	2	
H23	△	-	○ 1羽	-	△	○ 2羽	落巢	○ 2羽	/	△	△	△	-	-	△	△	-	○ 1羽	4	0	4	100.0%	6	1
H24	△	-	○ 1羽	-	△	○ 1羽	△	△	/	△	△	△	-	-	△	△	-	△	2	0	2	100.0%	2	
H25	△	△	○ 2羽	△	○ 1羽	×	△	×	/	○ 1羽	△	△	△	△	△	△	×	○ 1羽	4	3	7	57.1%	5	
H26	?	△	△	△	×	△	×	○ 1羽	/	△	△	△	△	×	△	×	×	×	1	6	7	14.3%	1	
H27	×	×	△	△	×	△	△	×	△	○ 2羽	落巢	△	△	×	落巢	△	落巢	×	1	6	7	14.3%	2	3
H28	×	○ 1羽	落巢	×	崩壊	△	△	×	落巢	○ 2羽	△	△	×	×	△	△	△	○ 2羽	3	5	8	37.5%	5	3
繁殖成功 ○	0	1	4	0	3	2	3	2	0	3	0	2	0	0	0	0	0	3						
繁殖失敗 ×	2	1	0	1	2	2	1	3	0	1	1	0	1	3	0	2	2	2						
繁殖回数 (○+×)	2	2	4	1	5	4	4	5	0	4	1	2	1	3	0	2	2	5						
成功率 (%)	0%	50.0%	100.0%	0%	60.0%	50.0%	75.0%	40.0%	-	75.0%	0%	100.0%	0%	0%	-	0%	0%	60.0%						
巣立数	0	1	6	0	5	3	5	3	0	5	0	3	0	0	0	0	0	4						
合計(各地区)																			合計 (全地区)	(参考)名寄地区を 除いた合計				
繁殖成功 ○	13							7					0					3	23	23				
繁殖失敗 ×	9							5					8					2	24	16				
繁殖回数 (○+×)	22							12					8					5	47	39				
繁殖成功率	59.1%							58.3%					0%					60.0%	48.9%	59.0%				
巣立数	20							11					0					4	35	35				

○ 産卵し巣立を確認
△ 産卵なし
× 産卵したが巣立なし、もしくは巣立未確認
? 不明
- 調査なし

※)網掛けは中川研究林調査
※)岩尾内ダムは繁殖情報がないため除外した。

e) 巣間距離

希少猛禽類保護の観点から具体的な営巣地を示すことはできないが、既知の全営巣地間の図上直線距離を計測した結果、天塩川中・上流部の巣間距離は以下のようになった。

中川・音威子府地区3.2～8.6km、美深地区2.7～7.5km、名寄地区4.0～4.7km。なお、ここに示した巣間距離は営巣木間の距離であり、平成28年現在、落巣・崩壊しているものも含む。また、予備巣については除外した。

(5) 繁殖と気象の関係

天塩川中・上流部は亜寒帯気候に属し、年間最低気温が-30℃にも達する道内有数の豪雪地帯である。一般的に道内のオジロワシの産卵は4～5月といわれており、この時期の積雪と気温が繁殖成功率に大きな影響を及ぼす可能性があることから、各地区の繁殖履歴と積雪及び気温の関係を表-2に整理した。

a) 積雪

天塩川中・上流部のオジロワシにとって、冬季は巢上に1m以上の積雪があるなど、積雪が巣作り・巣繕いおよび産卵活動に大きく影響している可能性がある。

音威子府地区（中川地区にはアメダス積雪データがな

表-2 繁殖結果と気象の関係

営巣地	積雪ゼロ日	4月最大積雪深(cm)	日平均気温(℃)				月最低気温(℃)					
			4月	5月	6月	7月	4月	5月	6月	7月		
H20	○	4/23	104	4.9	9.6	13.5	19.0	-8.0	-3.7	2.9	5.7	
H21	○	5/2	162	3.6	11.4	14.3	16.0	-9.0	-1.9	5.9	8.8	
H22	×	○	5/6	172	2.4	8.4	18.0	19.7	-10.4	-2.2	3.2	11.6
H23	○	落巢	4/25	91	3.6	7.5	14.9	19.2	-10.8	-1.8	0.3	5.9
H24	○		5/1	158	3.3	9.9	14.3	18.6	-12.7	0.7	0.3	8.6
H25	×		5/12	190	3.3	7.9	15.5	20.9	-6.2	-0.9	3.2	10.5
H26	×		4/30	142	3.2	10.3	16.2	20.0	-8.7	0.3	5.7	10.2
H27			4/25	100	5.1	11.2	13.4	18.8	-5.8	-1.7	2.8	6.7
H28			5/3	126	3.1	12.1	13.6	18.7	-5.6	-3.4	1.9	8.8

営巣地	積雪ゼロ日	4月最大積雪深(cm)	日平均気温(℃)				月最低気温(℃)							
			4月	5月	6月	7月	4月	5月	6月	7月				
H20			○	4/11	44	6.1	10.8	15.1	20.4	-7.5	-2.4	4.6	7.3	
H21			×	○	4/18	82	4.1	12.3	15.5	17.2	-9.3	-2.1	6.9	10.0
H22			×		5/1	114	2.3	9.0	16.2	20.2	-11.3	-1.4	4.1	11.5
H23	○			4/13	57	3.7	8.1	15.3	19.8	-12.0	-2.2	-0.1	6.9	
H24				4/28	135	2.9	10.4	15.1	19.1	-12.4	0.9	0.0	8.0	
H25	×		○	4/28	131	2.9	8.5	16.3	21.4	-6.3	-0.9	3.0	11.6	
H26	○			4/27	88	2.8	10.8	16.8	20.2	-9.0	-0.8	6.2	10.0	
H27	×		○	落巢	4/14	48	5.3	11.5	14.0	19.4	-7.1	-1.4	2.0	6.5
H28	×	落巢	○	4/23	83	3.2	12.5	14.2	19.4	-6.4	3.3	2.2	8.4	

営巣地	積雪ゼロ日	4月最大積雪深(cm)	日平均気温(℃)				月最低気温(℃)						
			4月	5月	6月	7月	4月	5月	6月	7月			
H20				4/8	19	5.6	9.9	13.8	19.2	-8.1	-4.7	1.6	4.8
H21				4/18	100	3.7	11.3	15.1	17.0	-8.4	-2.9	6.3	9.2
H22				4/27	90	2.3	8.7	17.7	20.2	-13.1	-2.7	1.6	11.1
H23	○			4/11	50	3.5	7.7	14.9	19.4	-12.1	-3.9	-1.0	6.3
H24				4/26	118	2.9	10.1	14.5	18.6	-13.7	-0.7	2.4	8.4
H25	○			4/30	155	2.7	8.8	15.8	21.0	-7.7	-1.4	3.0	9.7
H26	×			4/26	94	2.3	10.6	17.2	19.6	-12.8	-1.9	4.8	8.5
H27	×			4/17	58	5.0	11.2	13.5	19.1	-8.6	-1.7	1.3	4.1
H28	○			4/17	62	3.2	12.4	13.9	18.9	-7.2	-4.9	1.3	8.7

○ 産卵し巣立を確認
 × 産卵したが巣立なし、もしくは未確認

いので除外した)は積雪ゼロ日が4月下旬～5月中旬で、4月の最大積雪深は91～190cmである。美深地区と名寄川地区は積雪ゼロ日が4月上旬～5月上旬で、4月の最大積雪深は19～155cmであり、音威子府地区よりも積雪ゼロ日が10日ほど早く、4月の最大積雪深も少ない。

積雪と繁殖成否の関係をみると、積雪ゼロ日の年変動は約3週間程度の開きがあるが、積雪ゼロ日が最も遅い年にも繁殖成功事例があるなど、有意な関係がみられなかった。

b) 気温

産卵・巣内育雛期における気温と繁殖の関係をみるため、表-2に4～7月の日平均気温と月最低気温を整理したが、これについても積雪と同様、有意な関係がみられなかった。

このことから、繁殖の成否は気象条件よりも、人間の活動や他の動物による捕食等の外的要因やつがいの繁殖経験等による影響の方が大きい可能性がある。

(6) 映像記録調査

美深地区の美深1営巣地では、ビデオカメラによるオジロワシ繁殖の映像記録調査を行った。撮影機材は、営巣木から約600m離れた対岸のプレハブ小屋に設置し、巣全体を撮影した。撮影機器は、CCDカメラ2台（SONY SA-48180）、レンズ（高倍率 TAMRON SP AF 200-500mm F5.0-6.3、低倍率 TAMRON SP AF 70-200mm F2.8）、デジタルビデオレコーダー（STRASSE FDS-410）であり、撮影期間は、繁殖に成功した平成23年が3月18日～10月28日、平成26年が2月21日～9月15日である。なお、平成25、27年は繁殖失敗のため、抱卵開始日までのデータしか得られなかった。

a) 繁殖経過

表-3に映像記録調査で確認した4例のオジロワシの繁殖経過を示す。平成23、26年は繁殖が成功し、幼鳥の巣立まで確認したが、平成25、27年は産卵したが孵化せず繁殖失敗に終わった。

美深地区の産卵は4月上旬から5月上旬に、孵化は5月下旬から6月中旬に、幼鳥の巣立は8月上旬から下旬にかけてそれぞれ確認した。また、繁殖経過と積雪や気温の関係について整理したが、繁殖の成否と気象条件に有意な関係がみられなかった。

表-3 繁殖経過

繁殖記録	H23	H25	H26	H27	備考
入巣開始	3/18	3/23	3/14	2/26	
交尾開始	3/21	3/26	3/23	3/8	
抱卵開始	5/3	4/9	機器故障	4/16	正確な産卵日は映像で確認出来ない。
孵化(1羽目)	6/8	-	5/20	-	H26年は2羽同時に雛を初確認した。
孵化(2羽目)	6/14	-	-	-	
雛(羽死亡?)	-	-	6/1	-	5/25以降大きい雛が小さい雛を突く行為あり。6/1を最後に雛1羽の確認なし。
巣立(1羽目)	8/22	-	8/3	-	
巣立(2羽目)	8/27	-	-	-	
(参考)積雪ゼロ日	4/13	4/28	4/27	4/14	美深(雨ダス)
(参考)日平均気温4月	3.7	2.9	2.8	5.3	美深(雨ダス)
(参考)日平均気温5月	8.1	8.5	10.8	11.5	美深(雨ダス)
(参考)日平均気温6月	15.3	16.3	16.2	16.8	美深(雨ダス)

b) 生活サイクル

図-3は、ビデオ撮影記録で得られた美深地区のオジロワシの生活サイクルと道内のオジロワシの生活サイクルを比較したものである。これによると、美深地区は抱卵期、巣内育雛期のいずれも道内の他事例より时期的に遅いことがわかった。これは、道内他地域に比べ気温が低く、積雪が多い気象条件が要因となっている可能性がある。

c) 餌の記録

図-4は、平成23年の繁殖でオジロワシが搬入した餌の内訳である。映像の解像度や陽炎の影響等で画像解析が困難なものが多いが、確認できた餌のほぼ全てが魚であった。判別不明の餌にも魚が含まれていることが考えられるため、美深地区のオジロワシの餌の4割以上は魚の可能性があり、河川への依存度が高いことが示唆された。

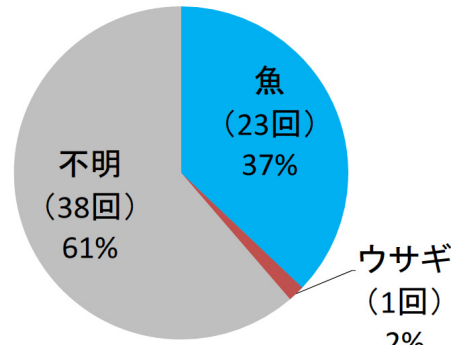


図4 搬入された餌の内訳

3. 名寄河川事務所の保全対策

名寄河川事務所のオジロワシ繁殖に対する保全の考え方を図-5に示す。名寄河川事務所では、営巣木と工事箇所の距離による影響の違いを考慮し、工事箇所をA区域(0.5km以内)、B区域(0.5~1.0km以内)、C区域(1.0~2.0km)に区分し、さらに、繁殖ステージごとにそれぞれの対応を設定している。

(1) 影響の回避

名寄河川事務所では、オジロワシの繁殖調査を3~6月にかけて実施し、工事着手前に繁殖情報を把握することに努めている。オジロワシの産卵・抱卵期~巣内育雛初期に工事予定がある場合、工事予定地が営巣木から1km圏内では工程を見直し、原則、作業を休止している。

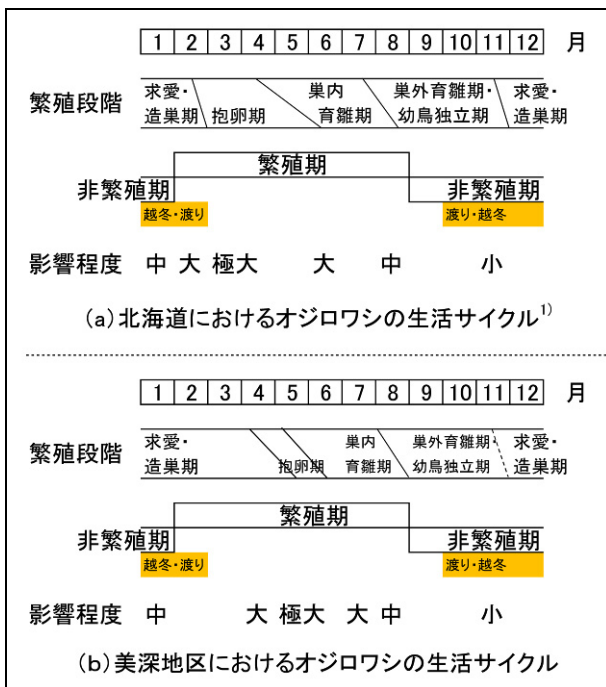


図-3 オジロワシの生活サイクルの比較



写真-2 オジロワシ巣上の積雪 (3月)

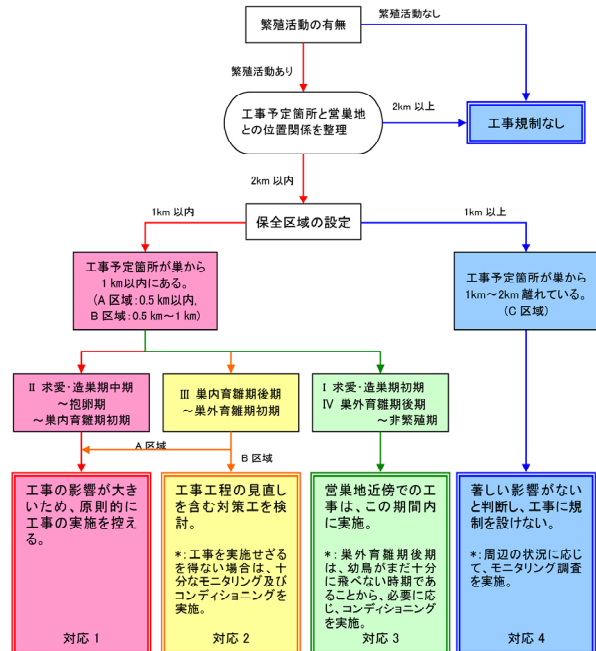


図-5 保全対策フロー

(2) 影響の低減

巢内育雛期後期以降の繁殖期は、工事工程の調整をしたうえで、やむを得ず着手しなければならない作業を実施している。工事に際しては、オジロワシの繁殖活動に与える影響を最小限に低減するため、作業計画の見直しを行い、オジロワシの馴化（コンディショニング）等最大限の配慮のもと、工事中モニタリングで繁殖への影響を確認しながら作業している。

なお、工事中モニタリング実施に当たっては、現地調査員が、対象とするオジロワシが繁殖を放棄する可能性があると判断した時点で、即時、作業を中断する権限を与えて不測の自体が発生しないよう万全の体制を敷いている。

表-4 これまでに実施した馴化（コンディショニング）の例

項目	内容
工事規模の段階的拡大	工事規模（重機稼働台数、工事車両台数、作業人数等）を徐々に拡大させる。
機械稼働時間等の段階的延長	重機の一日の総稼働時間及び連続稼働時間を段階的に長くする。作業休止時間を複数回設け、徐々に休止時間、休止回数を減らすことにより、重機の稼働時間を徐々に長くする。
工事箇所等の段階的施工	工事施工箇所が徐々に営巣箇所付近に近づく様に、離れた箇所から施工する。
繁殖期前からの着工による馴化	繁殖期前から重機の放置、軽微な作業を開始し、重機の稼働、工事車両の走行、作業等に馴れさせる。

表-5 工事中モニタリングの判断基準

警戒の程度	行動内容
高	<ul style="list-style-type: none"> ○嫌がる、避ける、逃げる等、通常とは異なる行動 【飛翔時】 <ul style="list-style-type: none"> ・音がすると不自然な方向転換を行って、遠ざかる ・飛翔中に音がすると急に羽ばたいて遠ざかる ・音等に驚いて、直ちに逃避する ・飛翔中に驚いてバランスを崩す 【止まり時】 <ul style="list-style-type: none"> ・体を起こして作業中の工事現場を凝視する ・動作が落ち着かなくなる ・工事作業に対し驚いて飛立ち、逃避する
中	<ul style="list-style-type: none"> ○警戒している 【飛翔時】 <ul style="list-style-type: none"> ・工事作業時の音に反応し、作業中の工事現場を凝視する、頻繁に見る 【止まり時】 <ul style="list-style-type: none"> ・体勢は変えないが、工事作業時の音が聞こえるたび、あるいは頻繁に作業中の工事現場を見る ・警戒声を発する
低	<ul style="list-style-type: none"> ○あまり気にしていない 【飛翔時】 <ul style="list-style-type: none"> ・平常時の飛翔行動中に工事現場の方を時々見る ・作業員や重機の上に飛来し、下方を見る 【止まり時】 <ul style="list-style-type: none"> ・体勢は変えないが、音のする方を時々見る

4. あとがき

名寄河川事務所がこれまでに実施した調査データを検証した結果、天塩川中・上流部のオジロワシの生態の一端が明らかになった。

天塩川中・上流部のオジロワシの生活サイクルは道内他地域に比べ抱卵期、巢内育雛期、巢外育雛期のいずれの段階も開始が遅く、中でも抱卵期は4月上旬から6月上旬の短期間に行われるなど、寒冷で積雪が多い道北の気象条件を反映した結果を示した。

また、近年、天塩川中・上流部のオジロワシの主要な繁殖地が中川・音威子府地区から美深地区に移行している可能性が示唆された。これは、美深地区の河川整備事業が最盛期を迎えている名寄河川事務所において、オジロワシの保全・共生に対する取り組みの重要性が増していることを示している。

名寄河川事務所のオジロワシ繁殖への保全対策は、繁殖調査、営巣地周辺作業における影響の回避・低減のための事前検討、やむを得ず営巣地周辺で作業する場合のコンディショニングおよびモニタリング調査等が主であり、これまで成果を挙げてきた。しかし、保全対策の成否は対象個体の行動や特徴を正確・確実に把握することが肝要であり、基礎調査の重要性を十分認識し、そのうえでオジロワシが野生動物であり、従来の知見が適用できない場面に遭遇する可能性があることも考慮する必要がある。

また、近年、オジロワシ繁殖中に周辺で他機関が土工や伐開等の作業を開始する事例が見受けられた。そこで、名寄河川事務所ではこれらの機関に対して積極的に情報を提供し、オジロワシ繁殖成功への理解と協力を求める取り組みも行っている。

参考文献

- 1) 応用生体工学会 札幌 北海道猛禽類研究会：北海道の猛禽類
- 2) 奥田篤志、斉藤満：中川研究林における猛禽類の長期モニタリング
- 3) 杉山弘、斉藤満：北海道天塩川中流域のオジロワシの繁殖状況と繁殖期の食物資源について